

Rec'd PCT/PTO 03 OCT 2005

PCT/JP 2004/004854

日本国特許庁
JAPAN PATENT OFFICE

10/552283

02. 4. 2004

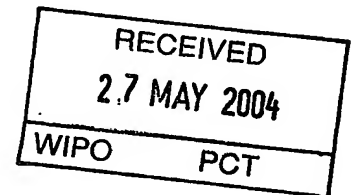
別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日
Date of Application: 2003年 5月28日

出願番号
Application Number: 特願2003-150712
[ST. 10/C]: [JP 2003-150712]

出願人
Applicant(s): 株式会社ブリヂストン

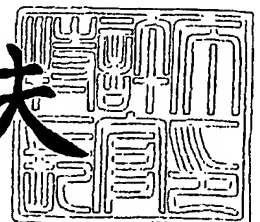


PRIORITY DOCUMENT
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH
RULE 17.1(a) OR (b)

2004年 5月14日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

今井康夫



BEST AVAILABLE COPY

出証番号 出証特 2004-3040209

【書類名】 特許願

【整理番号】 P241005

【提出日】 平成15年 5月28日

【あて先】 特許庁長官 太田 信一郎 殿

【国際特許分類】 G09F 9/37

【発明の名称】 白色粒子、白色粉流体及びそれを用いた画像表示装置

【請求項の数】 7

【発明者】

【住所又は居所】 東京都小平市小川東町 3-1-1 株式会社 ブリヂス
トン 技術センター内

【氏名】 町田 邦郎

【発明者】

【住所又は居所】 東京都小平市小川東町 3-1-1 株式会社 ブリヂス
トン 技術センター内

【氏名】 西室 陽一

【特許出願人】

【識別番号】 000005278

【氏名又は名称】 株式会社 ブリヂストン

【代理人】

【識別番号】 100072051

【弁理士】

【氏名又は名称】 杉村 興作

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 074997

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9712186

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 白色粒子、白色粉流体及びそれを用いた画像表示装置

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 少なくとも一方が透明な対向する基板間に粒子群を封入し、粒子群に電界を与えて粒子を移動させ画像を表示する画像表示装置に用いる白色粒子であって、バインダーを被覆した白色顔料の 1 次粒子を凝集または造粒して所定の粒子径とした 2 次粒子からなり、その内部に微小気泡を含むことを特徴とする白色粒子。

【請求項 2】 白色顔料が酸化チタンである請求項 1 に記載の白色粒子。

【請求項 3】 バインダーが低屈折率材料からなる請求項 1 または 2 に記載の白色粒子。

【請求項 4】 2 次粒子の凝集または造粒を、流動気流中でまたは機械的に混合攪拌し、多数の微細気泡を導入して行う請求項 1 ～ 3 のいずれか 1 項に記載の白色粒子。

【請求項 5】 平均粒子径 $d(0.5)$ が $0.1 \sim 50 \mu\text{m}$ である請求項 1 ～ 4 のいずれか 1 項に記載の白色粒子。

【請求項 6】 請求項 1 ～ 5 のいずれか 1 項に記載の白色粒子を用いたことを特徴とする白色粉流体。

【請求項 7】 少なくとも一方が透明な対向する基板間に粒子群または粉流体を封入し、粒子群または粉流体に電界を与えて粒子または粉流体を移動させ画像を表示する画像表示装置において、粒子群または粉流体の少なくとも 1 種類として請求項 1 ～ 5 のいずれか 1 項に記載の白色粒子または請求項 6 に記載の白色粉流体を用いたことを特徴とする画像表示装置。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、画像表示装置に用いる白色粒子に関し、特に、クーロン力等による粒子の飛翔移動または粉流体の移動を利用することで画像表示を繰り返し行うことができる可逆性画像表示装置に用いられる白色粒子、白色粉流体及びそれを用

いた画像表示装置に関するものである。

【0002】

【従来の技術】

近年、ペーパーレス化といった環境意識の高揚に伴い、電氣的な力を利用して表示基板に所望の画像を表示でき、さらには書き換えも可能であるような電子ペーパーディスプレイに関する研究がなされてきている。この電子ペーパー技術において特に有名なのは、電気泳動型、サーマルリライタブル型等といった液相型のものであるが、液相型では液中を粒子が泳動するので、液の粘性抵抗により応答速度が遅くなるという問題があるため、最近では、対向する基板間に絶縁着色粒子が封入された構成の乾式のものが着目されている（例えば、非特許文献1参照）。

【0003】

【非特許文献1】

趙 国来、外3名、“新しいトナーディスプレイデバイス（I）”、1999年7月21日、日本画像学会年次大会（通算83回）“Japan Hardcopy' 99”論文集、p.249-252

【0004】

【発明が解決しようとする課題】

上述した乾式の画像表示装置は、電気泳動方式に対し粒子の移動抵抗が小さく応答速度が速いという長所がある。この乾式の画像表示装置における画像表示の原理は、各粒子によってパターンを形成し、各粒子の色調によりコントラストを得ることによってパターンを認識させるものである。そのため、色を発光するベースとなる白色粒子の色が重要であった。

【0005】

従来、白色粒子等の着色粒子としては、顔料、染料をポリマーに練り込み、粉碎、分級して得た粉碎粒子、各種重合法、例えば懸濁重合、乳化重合、シード重合等により顔料、染料を内包させて得た重合粒子、母粒子表面に顔料、染料などを付着させた複合粒子、等が知られている。しかしながら、粉碎粒子では、粒子形状がばらつき、顔料や染料の充填量に限界があり所定の色が出せず、粉碎時に

クラック発生等のダメージを受ける問題があった。また、顔料や染料の重合粒子では、充填量がさらに小さく所定の色が出せない問題があった。さらに、複合粒子では、母粒子内部に顔料、染料が存在しないため発色が足りなかったり、顔料、染料が表面から剥がれやすかったり、製造工程が多くなったりする問題があった。

【0006】

本発明の目的は上述した課題を解決して、隠ぺい力（反射率）を大幅に向上させることができる白色粒子、白色粉流体及びそれを用いた画像表示装置を提供しようとするものである。

【0007】

【課題を解決するための手段】

本発明の白色粒子は、少なくとも一方が透明な対向する基板間に粒子群を封入し、粒子群に電界を与えて粒子を移動させ画像を表示する画像表示装置に用いる白色粒子であって、バインダーを被覆した白色顔料の1次粒子を凝集または造粒して所定の粒子径とした2次粒子からなり、その内部に微小気泡を含むことを特徴とするものである。

【0008】

本発明の白色粒子では、表面にバインダーを被覆した白色顔料好ましくは酸化チタン顔料を凝集または造粒させ、内部に多数の微小気泡を導入することで、隠ぺい力（反射率）を大幅に向上させることができる。特に、酸化チタンの隠ぺい力は充填量に比例して増加するものではなく、Mieの理論によれば、充填量が増すに従い顔料の光散乱効率が低下するため、約30%の体積分率で隠ぺい力はピークを示す。充填量をさらに増加させると最密充填状態に近づき、微細気泡が導入されて隠ぺい力は一挙に向上する。本発明はこの現象を利用している。

【0009】

本発明の白色粒子の好適例としては、白色顔料が酸化チタンであること、バインダーが低屈折率材料からなること、2次粒子の凝集または造粒を、流動気流中または機械的に混合攪拌し、多数の微細気泡を導入して行うこと、平均粒子径 $d(0.5)$ が $0.1 \sim 50 \mu\text{m}$ であること、がある。このように白色粒子の材

料を選択すること、および、粒子の平均粒子径を所定の範囲にすることにより、白色粒子の隠ぺい力（反射率）を更に向上させることができる。

【0010】

また、本発明の白色粉流体は、上述した構成の白色粒子を用いたことを特徴とするものである。さらに、本発明の画像表示装置は、少なくとも一方が透明な対向する基板間に粒子群または粉流体を封入し、粒子群または粉流体に電界を与えて粒子または粉流体を移動させ画像を表示する画像表示装置において、粒子群または粉流体の少なくとも1種類として上述した白色粒子または上述した白色粉流体を用いたことを特徴とするものである。

【0011】

【発明の実施の形態】

まず、本発明の白色粒子または白色粉流体を用いた画像表示装置の構成について説明する。本発明の画像表示装置では、対向する基板間に粒子群を封入した画像表示用パネルに何らかの手段でその基板間に電界が付与される。高電位の基板部位に向かっては低電位に帯電した粒子がクーロン力などによって引き寄せられ、また低電位の基板部位に向かっては高電位に帯電した粒子がクーロン力などによって引き寄せられ、それら粒子が2枚の基板間を往復運動することにより、画像表示がなされる。従って、粒子が、均一に移動し、かつ、繰り返し時あるいは保存時の安定性を維持できるように、画像表示用パネルを設計する必要がある。ここで、粒子にかかる力は、粒子同士のクーロン力により引き付けあう力の他に、電極との電気影像力、分子間力、液架橋力、重力などが考えられる。以上の構成は粉流体を用いた場合も同様である。

【0012】

本発明の画像表示装置で用いる画像表示用パネルは、2種以上の色の異なる粒子3（図1参照、ここでは白色粒子3Wと黒色粒子3Bを示す）を基板1、2と垂直方向に移動させることによる表示方式に用いるパネルと、1種の色粒子3W（図2参照）を基板1、2と平行方向に移動させることによる表示方式に用いるパネルとのいずれへも適用できる。表示のためのパネル構造例を図3に示す。なお、図1～図3において、4は必要に応じて設ける隔壁、5、6は粒子3に電

界を与えるための電極である。以上の説明は、白色粒子 3W を白色粉流体に、黒色粒子 3B を黒色粉流体に、それぞれ置き換えた場合も同様に適用することが出来る。

【0013】

本発明の特徴は、粒子のうち白色粒子 3W とその白色粒子 3W を利用した白色粉流体に関する。以下、白色粒子と白色粉流体について説明する。

【0014】

まず、本発明の白色粒子について説明する。

図 4 (a) ~ (c) はそれぞれ本発明の白色粒子の製造方法の一例を工程順に示す図である。図 4 (a) ~ (c) に従って本発明の白色粒子を説明すると、まず、図 4 (a) に示すように、白色顔料ここでは一例として酸化チタン 11 の 1 次粒子を準備する。酸化チタン 11 としては顔料酸化チタンを用いることが好ましい。また、この 1 次粒子の平均粒子径は、最終的に求めたい白色粒子の平均粒子径より小さければ良く、一例として $0.01 \sim 1.0 \mu\text{m}$ の範囲が好ましい。更に好ましくは、反射率の最も高くなる $0.2 \sim 0.3 \mu\text{m}$ の範囲がよい。

【0015】

次に、準備した酸化チタン 11 の 1 次粒子表面に、バインダー 12 を薄くコーティングする。このバインダー 12 としては、低屈折率材料であってコーティング可能であれば何でも使用でき、例えば、アクリル、PS (ポリスチレン)、PE (ポリエチレン)、PET (ポリエチレンテレフタレート)、PC (ポリカーボネート)、POM (ポリアセタール)、フッ素、エポキシ、シランカップリング剤各種、シロキ酸各種等を好適に使用することができる。また、コーティング法としては、バインダー 12 を溶剤に溶いて酸化チタン 11 の 1 次粒子にスプレーする方法や、バインダー 12 の溶液に酸化チタン 11 の 1 次粒子を分散させスプレー噴霧、乾燥する方法を好適にとることができる。

【0016】

次に、表面にバインダー 12 をコーティングした酸化チタン 11 の 1 次粒子を、流動気流中でまたは機械的に混合攪拌し、多数の微細気泡を導入しながら所定の粒子径に凝集、造粒させる。その結果、図 4 (c) に示すように、その内部に

微小気泡 13 を含み、バインダー 12 を被覆した酸化チタン 11 の 1 次粒子を凝集または造粒した、所定の粒子径の 2 次粒子を白色粒子 14 として得ることができる。なお、凝集、造粒操作は、酸化チタン 12 の 1 次粒子にバインダー 12 をコーティングする際に行うこともできる。上記顔料酸化チタンに代えて、酸化亜鉛を用いてもよい。

【0017】

以下、上述したようにして得られた白色粒子 14 を画像表示装置に用いる場合に、一般的に粒子として必要となる好ましい条件を説明する。

【0018】

まず、ここで繰り返し耐久性を更に向上させるためには、該粒子を構成する樹脂の安定性、特に、吸水率と溶剤不溶率を管理することが効果的である。

基板間に封入する粒子を構成する樹脂の吸水率は、3 重量%以下、特に 2 重量%以下とすることが好ましい。なお、吸水率の測定は、ASTM D570 に準じて行い、測定条件は 23℃で 24 時間とする。

該粒子を構成する樹脂の溶剤不溶率に関しては、下記関係式で表される粒子の溶剤不溶率を 50%以上、特に 70%以上とすることが好ましい。

$$\text{溶剤不溶率 (\%)} = (B/A) \times 100$$

(但し、A は樹脂の溶剤浸漬前重量、B は良溶媒中に樹脂を 25℃で 24 時間浸漬した後の重量を示す)

この溶剤不溶率が 50%未満では、長期保存時に粒子表面にブリードが発生し、粒子との付着力に影響を及ぼし粒子の移動の妨げとなり、画像表示耐久性に支障をきたす場合がある。

なお、溶剤不溶率を測定する際に用いる溶剤（良溶媒）としては、フッ素樹脂ではメチルエチルケトン等、ポリアミド樹脂ではメタノール等、アクリルウレタン樹脂ではメチルエチルケトン、トルエン等、メラミン樹脂ではアセトン、イソプロパノール等、シリコーン樹脂ではトルエン等が好ましい。

【0019】

また、粒子は球形であることが好ましい。

本発明では、各粒子の粒子径分布に関して、下記式に示される粒子径分布 Span

を5未満、好ましくは3未満とする。

$$\text{Span} = (d(0.9) - d(0.1)) / d(0.5)$$

(但し、 $d(0.5)$ は粒子の50%がこれより大きく、50%がこれより小さいという粒子径を μm で表した数値、 $d(0.1)$ はこれ以下の粒子の比率が10%である粒子径を μm で表した数値、 $d(0.9)$ はこれ以下の粒子が90%である粒子径を μm で表した数値である。)

Spanを5以下の範囲に納めることにより、各粒子のサイズが揃い、均一な粒子移動が可能となる。

【0020】

さらに、各粒子の平均粒子径 $d(0.5)$ を、 $0.1 \sim 50 \mu\text{m}$ とすることが好ましい。この範囲より大きいと表示上の鮮明さに欠け、この範囲より小さいと粒子同士の凝集力が大きすぎるために粒子の移動に支障をきたすようになる。

さらにまた、各粒子の相関について、使用した粒子の内、最大径を有する粒子の $d(0.5)$ に対する最小径を有する粒子の $d(0.5)$ の比を50以下、好ましくは10以下とすることが肝要である。

たとえ粒子径分布Spanを小さくしたとしても、互いに帯電特性の異なる粒子が互いに反対方向に動くので、互いの粒子サイズが近く、互いの粒子が等量ずつ反対方向に容易に移動できるようにするのが好適であり、それがこの範囲となる。

【0021】

なお、上記の粒子径分布および粒子径は、レーザー回折／散乱法などから求めることができる。測定対象となる粒子にレーザー光を照射すると空間的に回折／散乱光の光強度分布パターンが生じ、この光強度パターンは粒子径と対応関係があることから、粒子径および粒子径分布が測定できる。

本発明における粒子径および粒子径分布は、体積基準分布から得られたものである。具体的には、Mastersizer2000(Malvern Instruments Ltd.) 測定機を用いて、窒素気流中に粒子を投入し、付属の解析ソフト(Mie理論を用いた体積基準分布を基本としたソフト)にて、粒子径および粒子径分布の測定を行なうことができる。

【0022】

次に、本発明の白色粉流体について説明する。本発明の白色粉流体は、上述した構成の各種の白色粒子を使用することで達成することができる。

本発明における「粉流体」は、気体の力も液体の力も借りずに、自ら流動性を示す、流体と粒子の特性を兼ね備えた両者の中間状態の物質である。例えば、液晶は液体と固体の中間的な相と定義され、液体の特徴である流動性と固体の特徴である異方性（光学的性質）を有するものである（平凡社：大百科事典）。一方、粒子の定義は、無視できるほどの大きさであっても有限の質量をもった物体であり、重力の影響を受けるとされている（丸善：物理学事典）。ここで、粒子でも、気固流動層体、液固流動体という特殊状態があり、粒子に底板から気体を流すと、粒子には気体の速度に対応して上向きの力が作用し、この力が重力とつりあう際に、流体のように容易に流動できる状態になるものを気固流動層体と呼び、同じく、流体により流動化させた状態を液固流動体と呼ぶとされている（平凡社：大百科事典）。このように気固流動層体や液固流動体は、気体や液体の流れを利用した状態である。本発明では、このような気体の力も、液体の力も借りずに、自ら流動性を示す状態の物質を、特異的に作り出せることが判明し、これを粉流体と定義した。

【0023】

すなわち、本発明における粉流体は、液晶（液体と固体の中間相）の定義と同様に、粒子と液体の両特性を兼ね備えた中間的な状態で、先に述べた粒子の特徴である重力の影響を極めて受け難く、高流動性を示す特異な状態を示す物質である。このような物質はエアロゾル状態、すなわち気体中に固体状もしくは液体状の物質が分散質として安定に浮遊する分散系で得ることができ、本発明の画像表示装置で固体状物質を分散質とするものである。

【0024】

本発明の対象となる画像表示装置は、少なくとも一方が透明な、対向する基板間に、気体中に固体粒子が分散質として安定に浮遊するエアロゾル状態で高流動性を示す粉流体を封入するものであり、このような粉流体は、低電圧の印加でクーロン力などにより容易に安定して移動させることができる。

【0025】

粉流体とは、先に述べたように、気体の力も液体の力も借りずに、自ら流動性を示す、流体と粒子の特性を兼ね備えた両者の中間状態の物質である。この粉流体は、特にエアロゾル状態とすることができ、本発明の画像表示装置では、気体中に固体状の物質が分散質として比較的安定に浮遊する状態で用いられる。

【0026】

エアロゾル状態の範囲は、粉流体の最大浮遊時の見かけ体積が未浮遊時の2倍以上であることが好ましく、更に好ましくは2.5倍以上、特に好ましくは3倍以上である。上限は特に限定されないが、12倍以下であることが好ましい。

粉流体の最大浮遊時の見かけ体積が未浮遊時の2倍より小さいと表示上の制御が難しくなり、また、12倍より大きいと粉流体を装置内に封入する際に舞い過ぎてしまうなどの取扱い上の不便が生じる。なお、最大浮遊時の見かけ体積は次のようにして測定される。すなわち、粉流体が透過して見える密閉容器に粉流体を入れ、容器自体を振動或いは落下させて、最大浮遊状態を作り、その時の見かけ体積を容器外側から測定する。具体的には、直径（内径）6 cm、高さ10 cmのポリプロピレン製の蓋付き容器（商品名アイボーイ：アズワン（株）製）に、未浮遊時の粉流体として1/5の体積相当の粉流体を入れ、振とう機に容器をセットし、6 cmの距離を3往復/secで3時間振とうさせる。振とう停止直後の見かけ体積を最大浮遊時の見かけ体積とする。

【0027】

また、本発明の粉流体の見かけ体積の時間変化が次式を満たすものが好ましい。

$$V_{10}/V_5 > 0.8$$

ここで、 V_5 は最大浮遊時から5分後の見かけ体積（ cm^3 ）、 V_{10} は最大浮遊時から10分後の見かけ体積（ cm^3 ）を示す。なお、本発明の画像表示装置は、粉流体の見かけ体積の時間変化 V_{10}/V_5 が0.85よりも大きいものが好ましく、0.9よりも大きいものが特に好ましい。 V_{10}/V_5 が0.8以下の場合は、通常のいわゆる粒子を用いた場合と同様となり、本発明のような高速応答、耐久性の効果が確保できなくなる。

【0028】

また、粉流体を構成する粒子物質の平均粒子径 $d(0.5)$ は、好ましくは $0.1 \sim 20 \mu\text{m}$ 、更に好ましくは $0.5 \sim 15 \mu\text{m}$ 、特に好ましくは $0.9 \sim 8 \mu\text{m}$ である。 $0.1 \mu\text{m}$ より小さいと表示上の制御が難しくなり、 $20 \mu\text{m}$ より大きいと、表示はできるものの隠蔽率が下がり装置の薄型化が困難となる。なお、粉流体を構成する粒子物質の平均粒子径 $d(0.5)$ は、次の粒子径分布 Span における $d(0.5)$ と同様である。

本発明の白色粉流体では、上述した構成の本発明の白色粒子を構成物質の一部とするが、白色粒子単独で使用する場合は平均粒子径の範囲と粉流体の構成物質として使用する場合は白色粒子の平均粒子径の範囲とは、若干異なっている。

【0029】

粉流体を構成する粒子物質は、本発明の白色粒子を用いる場合も含めて、下記式に示される粒子径分布 Span が 5 未満であることが好ましく、更に好ましくは 3 未満である。

$$\text{粒子径分布 Span} = (d(0.9) - d(0.1)) / d(0.5)$$

ここで、 $d(0.5)$ は粉流体を構成する粒子物質の 50% がこれより大きく、50% がこれより小さいという粒子径を μm で表した数値、 $d(0.1)$ はこれ以下の粉流体を構成する粒子物質の比率が 10% である粒子径を μm で表した数値、 $d(0.9)$ はこれ以下の粉流体を構成する粒子物質が 90% である粒子径を μm で表した数値である。粉流体を構成する粒子物質の粒子径分布 Span を 5 以下とすることにより、サイズが揃い、均一な粉流体移動が可能となる。

【0030】

なお、以上の粒子径分布および粒子径は、レーザー回折／散乱法などから求めることができる。測定対象となる粉流体にレーザー光を照射すると空間的に回折／散乱光の光強度分布パターンが生じ、この光強度パターンは粒子径と対応関係があることから、粒子径および粒子径分布が測定できる。この粒子径および粒子径分布は、体積基準分布から得られる。具体的には、Mastersizer2000(Malvern Instruments Ltd.)測定機を用いて、窒素気流中に粉流体を投入し、付属の解析ソフト(Mie理論を用いた体積基準分布を基本としたソフト)にて、測定を行うことができる。

【0031】

以下、本発明の白色粒子または白色粉流体を利用する画像表示装置の構成について説明する。

【0032】

まず、基板について述べる。

基板1、基板2の少なくとも一方は装置外側から粒子群または粉流体の色が確認できる透明基板であり、可視光の透過率が高くかつ耐熱性の良い材料が好適である。可とう性の有無は用途により適宜選択され、例えば、電子ペーパー等の用途には可とう性のある材料、携帯電話、PDA、ノートパソコン類の携帯機器表示等の用途には可とう性のない材料が用いられる。

【0033】

基板材料を例示すると、ポリエチレンテレフタレート、ポリエーテルサルフォン、ポリエチレン、ポリカーボネートなどのポリマーシートや、ガラス、石英などの無機シートが挙げられる。

基板厚みは、2～5000 μ m、好ましくは5～1000 μ mが好適であり、薄すぎると、強度、基板間の間隔均一性を保ちにくくなり、厚すぎると、表示機能としての鮮明さ、コントラストの低下が発生し、特に、電子ペーパー用途の場合には可とう性に欠ける。

【0034】

基板には、必要に応じて電極を設けても良い。

基板に電極を設けない場合は、基板外部表面に静電潜像を与え、その静電潜像に応じて発生する電界にて、所定の特性に帯電した色のついた粒子群あるいは粉流体を基板に引き寄せあるいは反発させることにより、静電潜像に対応して配列した粒子群あるいは粉流体を透明な基板を通して表示装置外側から視認する。なお、この静電潜像の形成は、電子写真感光体を用い通常電子写真システムで行われる静電潜像を本発明の画像表示装置の基板上に転写形成する、あるいは、イオンフローにより静電潜像を基板上に直接形成する等の方法で行うことができる。

【0035】

基板に電極を設ける場合は、電極部位への外部電圧入力により、基板上の各電極位置に生じた電界により、所定の特性に帯電した色の粒子群あるいは粉流体が引き寄せあるいは反発させることにより、静電潜像に対応して配列した粒子群あるいは粉流体を透明な基板を通して表示装置外側から視認する方法である。

電極は、透明かつパターン形成可能である導電性材料で形成され、例示すると、酸化インジウム、アルミニウムなどの金属類、ポリアニリン、ポリピロール、ポリチオフェンなどの導電性高分子類が挙げられ、真空蒸着、塗布などの形成手法が例示できる。なお、電極厚みは、導電性が確保でき光透過性に支障なければ良く、 $3 \sim 1000 \text{ nm}$ 、好ましくは $5 \sim 400 \text{ nm}$ が好適である。この場合の外部電圧入力は、直流あるいは交流を重畳しても良い。

【0036】

次に、隔壁について説明する。

本発明の隔壁の形状は、表示にかかわる粒子のサイズあるいは粉流体のサイズにより適宜最適設定され、一概には限定されないが、隔壁の幅は $10 \sim 1000 \mu\text{m}$ 、好ましくは $10 \sim 500 \mu\text{m}$ に、隔壁の高さは $10 \sim 5000 \mu\text{m}$ 、好ましくは $10 \sim 500 \mu\text{m}$ に調整される。

また、隔壁を形成するにあたり、対向する両基板の各々にリブを形成した後に接合する両リブ法と、片側の基板上にのみリブを形成する片リブ法が考えられるが、本発明はどちらにも適用できる。

これらリブからなる隔壁により形成される表示セルは、基板平面方向からみて四角状、三角状、ライン状、円形状、六角状（ハニカム構造）が例示される。

表示側から見える隔壁断面部分に相当する部分（表示セルの枠部の面積）はできるだけ小さくした方が良く、画像表示の鮮明さが増す。

【0037】

ここで、隔壁の形成方法を例示すると、スクリーン印刷法、サンドブラスト法、感光体ペースト法、アディティブ法が挙げられる。

【0038】

更に、本発明においては基板間の粒子群または粉流体を取り巻く空隙部分の気体の管理が重要であり、表示安定性向上に寄与する。具体的には、空隙部分の気

体の湿度について、25℃における相対湿度を60%RH以下、好ましくは50%RH以下、更に好ましくは35%RH以下とすることが重要である。

この空隙部分とは、対向する基板間に挟まれる部分から、粒子群または粉流体の占有部分、隔壁の占有部分、装置シール部分を除いた、いわゆる粒子群または粉流体が接する気体部分を指すものとする。

空隙部分の気体は、先に述べた湿度領域であれば、その種類は問わないが、乾燥空気、乾燥窒素、乾燥アルゴン、乾燥ヘリウム、乾燥二酸化炭素、乾燥メタンなどが好適である。

この気体は、その湿度が保持されるように装置に封入することが必要であり、例えば、粒子群または粉流体の充填、基板の組み立てなどを所定湿度環境下にて行い、更に、外からの湿度侵入を防ぐシール材、シール方法を施すことが肝要である。

【0039】

本発明の画像表示装置に用いる表示用パネルにおける基板と基板の間隔は、粒子群または粉流体が移動できて、コントラストを維持できればよいが、通常10～5000 μ m、好ましくは10～500 μ mに調整される。対向する基板間の空間における粒子群または粉流体の体積占有率は、10～80vol%の範囲が好ましく、さらに好ましくは10～60vol%である。80vol%を超える場合には粒子群または粉流体の移動の支障をきたし、10vol%未満の場合にはコントラストが不明確となり易い。ここで、空間体積とは、対向する基板1、基板2に挟まれる部分から、隔壁4の占有部分、装置シール部分を除いた、いわゆる粒子群または粉流体を充填可能な体積を指すものとする。

【0040】

本発明の画像表示装置に用いる表示用パネルにおいてモノクロ（モノトーン）表示を行う場合は、白色粒子（あるいは粉流体）と白色以外の濃い有色の粒子（あるいは粉流体）を組み合わせ用い、フルカラー表示を行う場合は、白色粒子（あるいは粉流体）と黒色粒子（あるいは粉流体）を組み合わせ用い、さらに各セルに対応した色の領域を複数有する、例えば、R（赤色）、G（緑色）、B（青色）の3原色カラーの組みを複数持つカラーフィルターを用いる。

【0041】

なお、本発明の画像表示装置は、ノートパソコン、PDA、携帯電話などのモバイル機器の表示部、電子ブック、電子新聞などの電子ペーパー、看板、ポスター、黒板などの掲示板、コピー機、プリンター用紙代替のリライタブルペーパー、電卓、家電製品の表示部、ポイントカードなどのカード表示部などに用いられる。

【0042】

【実施例】

次に白色粒子についての実施例を示して、本発明を更に具体的に説明する。但し本発明は以下の実施例により限定されるものではない。

【0043】

<実施例1 (粒子)>

酸化チタン (CR-50、石原産業 (株) 製) とバインダー (アクリルとトルエン、メチルエチルケトン、酢酸エチルの混合溶液、濃度1%以下) とを用いて、粒子表面改質装置 (アグロマスタ、ホソカワミクロン (株) 製) で処理して、酸化チタンにバインダーをコーティングすると同時に凝集、造粒を行った。その結果、平均粒子径 $10\mu\text{m}$ のアクリルコーティングされた酸化チタンの凝集2次粒子として、本発明の白色粒子を得た。

【0044】

その後、得られた白色粒子について反射率 (隠ぺい力) を測定した。反射率は、白色粒子をガラス基板上に散布し、マクベス濃度計で測った1層当たりの反射率として求めた。測定結果は57%であった。

【0045】

<比較例1 (粒子)>

酸化チタン (CR-50、石原産業 (株) 製) 50重量部とアクリル樹脂100重量部とを、2軸混練機で練り、粉碎・分級して、酸化チタンの体積分率が12%で平均粒子径が $9\mu\text{m}$ の白色粒子を得た。得られた白色粒子に対し、実施例1と同様に反射率を測定したところ、反射率は18%であった。

【0046】

<比較例 2 (粒子)>

酸化チタン (CR-50、石原産業 (株) 製) 100 重量部とアクリル樹脂 100 重量部とを、2 軸混練機で練り、粉碎・分級して、酸化チタンの体積分率が 23% で平均粒子径が $9\ \mu\text{m}$ の白色粒子を得た。得られた白色粒子に対し、実施例 1 と同様に反射率を測定したところ、反射率は 38% であった。

【0047】

<実施例 2 (粉流体)>

ハイブリダイザー装置 (奈良機械製作所 (株) 製) を用いて、実施例 1 の白色粒子に外添剤 A (シリカ H2000/4、ワッカー社製) を投入し、4800 回転で 5 分間処理し、外添剤を、白色粒子表面に固定化し、白色粉流体になるように調製し、本発明の白色粉流体を得た。得られた本発明の白色粉流体に対し、実施例 1 と同様に反射率を測定したところ、反射率は 59% であった。

【0048】

<比較例 3 (粉流体)>

ハイブリダイザー装置 (奈良機械製作所 (株) 製) を用いて、比較例 1 の白色粒子に外添剤 A (シリカ H2000/4、ワッカー社製) を投入し、4800 回転で 5 分間処理し、外添剤を、白色粒子表面に固定化し、白色粉流体になるように調製した。得られた白色粉流体に対し、実施例 1 と同様に反射率を測定したところ、反射率は 19% であった。

【0049】

<比較例 4 (粉流体)>

ハイブリダイザー装置 (奈良機械製作所 (株) 製) を用いて、比較例 2 の白色粒子に外添剤 A (シリカ H2000/4、ワッカー社製) を投入し、4800 回転で 5 分間処理し、外添剤を、白色粒子表面に固定化し、白色粉流体になるように調製した。得られた白色粉流体に対し、実施例 1 と同様に反射率を測定したところ、反射率は 40% であった。

【0050】

【発明の効果】

以上の説明から明らかなように、本発明によれば、表面にバインダーを被覆し

た白色顔料好ましくは酸化チタン顔料を凝集または造粒させ、内部に多数の微小気泡を導入することで、白色粒子または白色粉流体の隠ぺい力（反射率）を大幅に向上させることができる。

【図面の簡単な説明】

【図1】 本発明の対象となる画像表示装置における表示方式の一例を示す図である。

【図2】 本発明の対象となる画像表示装置における表示方式の他の例を示す図である。

【図3】 本発明の対象となる画像表示装置におけるパネル構造の一例を示す図である。

【図4】 (a)～(c)はそれぞれ本発明の白色粒子の製造方法の一例を工程順に示す図である。

【符号の説明】

1、2 基板

3W 白色粒子

3B 黒色粒子

4 隔壁（リブ）

5、6 電極

11 酸化チタン（1次粒子）

12 バインダー

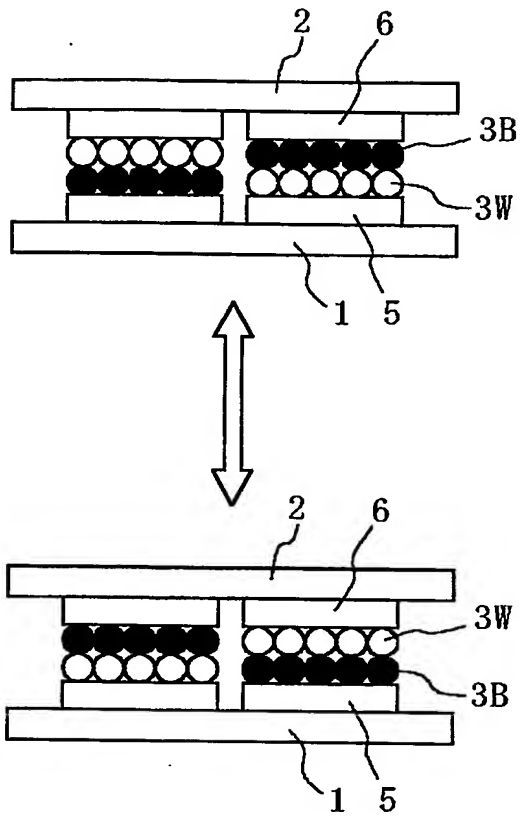
13 微小気泡

14 白色粒子（2次粒子）

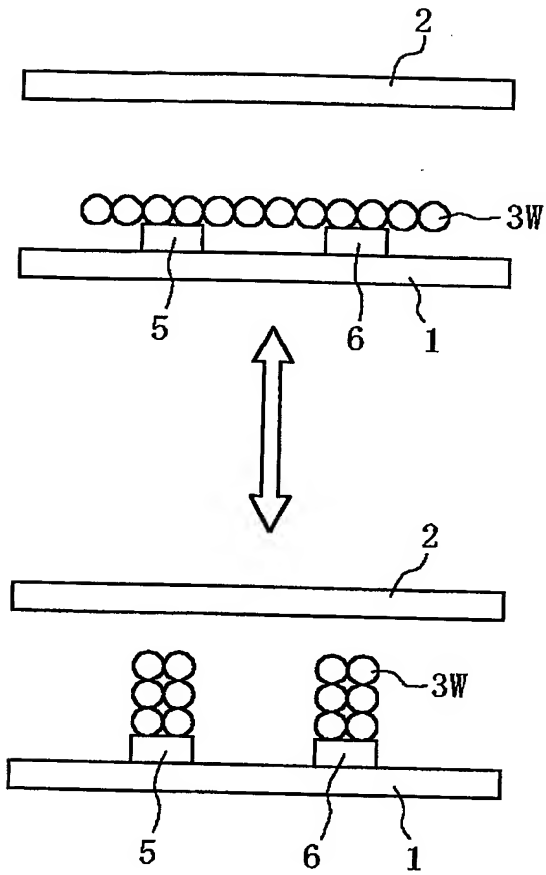
【書類名】

図面

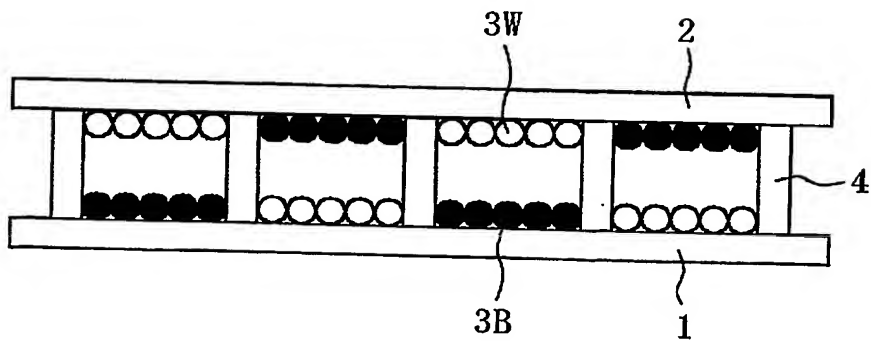
【図 1】



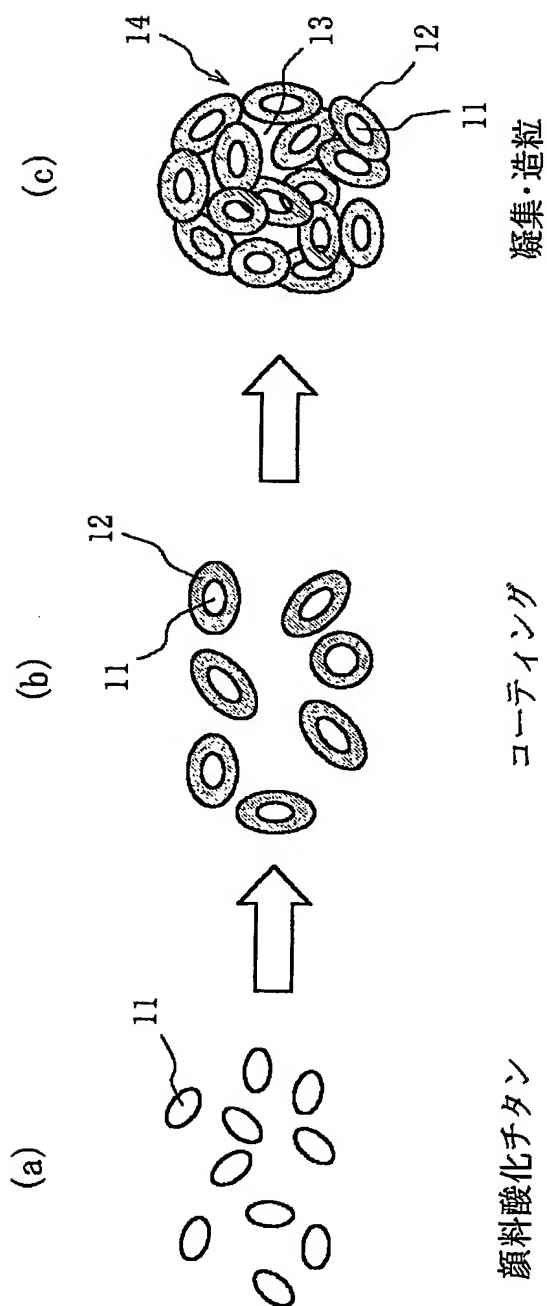
【図 2】



【図 3】



【図 4】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 隠ぺい力（反射率）を大幅に向上させることができる白色粒子、白色粉流体及びそれを用いた画像表示装置を提供する。

【解決手段】 少なくとも一方が透明な対向する基板 1、2 間に粒子 3W、3B からなる粒子群を封入し、粒子群に電界を与えて粒子を移動させ画像を表示する画像表示装置に用いる白色粒子 3W であって、バインダー 12 を被覆した白色顔料の 1 次粒子 11 を凝集または造粒して所定の粒子径とした 2 次粒子 14 からなり、その内部に微小気泡 13 を含む。また、この白色粒子を使用して白色粉流体を構成する。さらに、これら白色粒子または白色粉流体を使用して画像表示装置を構成する。

【選択図】 図 4

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号

[0 0 0 0 0 5 2 7 8]

1. 変更年月日

1 9 9 0 年 8 月 2 7 日

[変更理由]

新規登録

住 所

東京都中央区京橋 1 丁目 1 0 番 1 号

氏 名

株式会社ブリヂストン